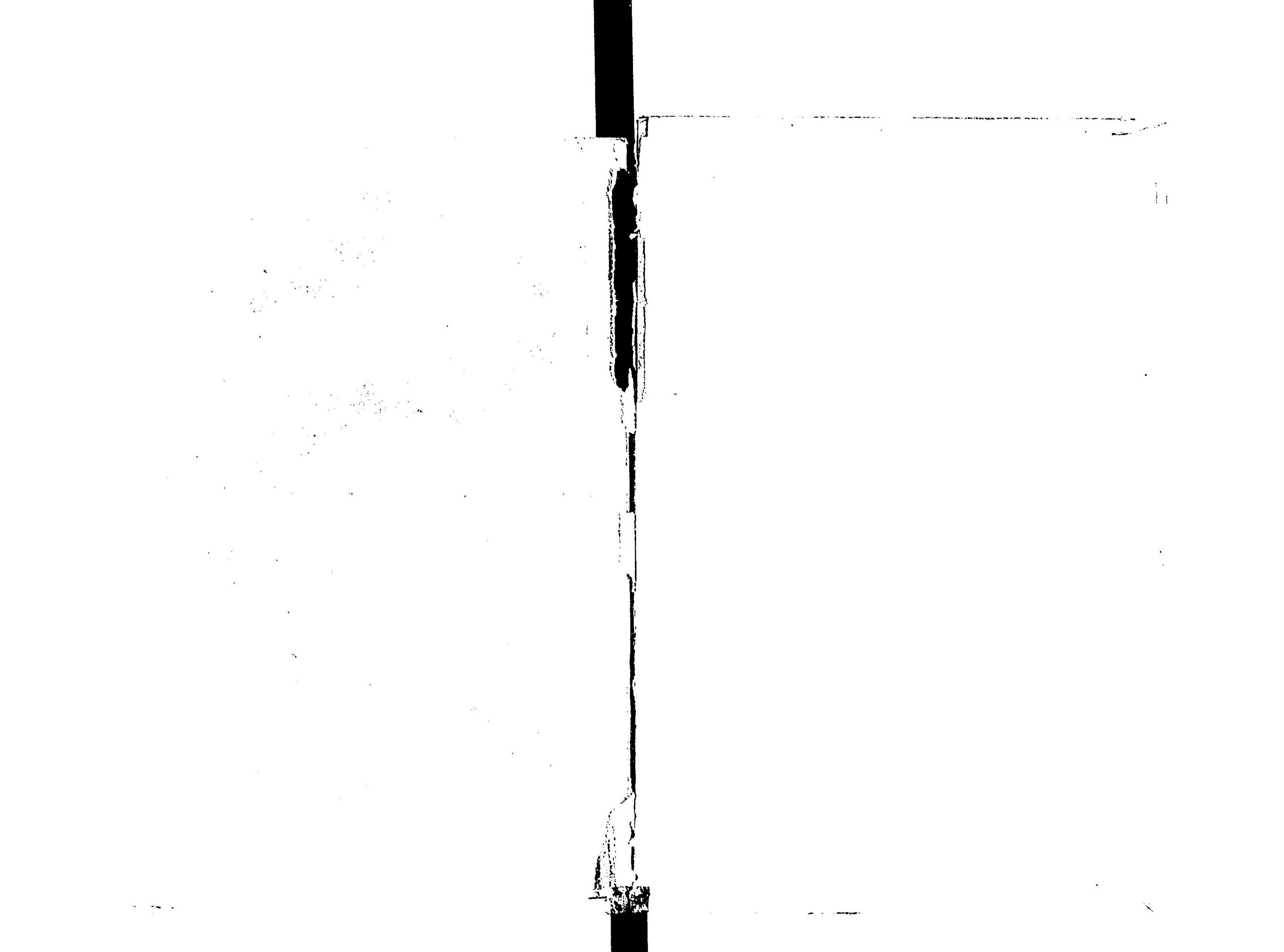


11  
7  
34

花  
迎  
將

六  
拾  
九  
日  
寫  
於  
...





No. 18660/22 持 64  
部の内新



唱歌

# 花の粹

## 粹の種本三編

山斑粹史閣

○二上り新内



○くさ木もね寐しびづひうしみの頃に二人しよんばり床の内ひ  
よんな妾しよ見込れてさずや世間が狭かるふ  
○け今朝も廊下であ字つりと切れし鼻緒の上草履もしや夕べは肝癢で切きとせぬかとあんぞ升わいな

○私しガ風邪かぜひで寐ねて居いたら枕まくらの拵しらばへそのと來きて飯めしでも  
たべぬか薬くすりをも其そのやさしさよ引替ひきかへて今いまの邪見じやけんはおまは  
んとおあきたのへ

○隅田すだの邊へりにすまひして萩はぎの葉はと戸四帖半とよておはんすたはひかい歌俳階うたばいかいや茶ちや  
洗湯せんとうしく主ぬしとふたりがわび住居すまい

○一度いちどの氣きやすめ二度にどの嘘うそ三度さんどのよもやに保たもたされく釋はな  
氣男きおとこのくせと去いて女房にようばよするとは是これが一寸おんつとの洒落じやれかぬあ

○去年こぞより今年こぞはふかふなる今日けふは昨日きのうに増ますおもひ親おやに  
も子こにも兄弟あいのうたいにもあへていとしい主ぬしじやもの飯令たさへどなた

の意見いけんでもされる心こころは更さらにない

○悪わるどめせずともこころはな終翌日あともの月日つきひもあいやうに止とど  
るろなたの心こころより歸かへる此身このみがどんあよくつゑかろふ

○他人たにんじや包ひいななせ他人たにんあすにも二人ふたりが切きれたらマ、  
あの人ひとと指ささして笑わらわしやんすが眼めに見みへる

○隣となり座敷ざしきの間夫まぶの客來きやくきて泣なたり泣なしたり身みよつまよ  
れくのもふ泣なせかれや今いまごろ來くるゑある

○はうた

○替歌 けさのせのれ

瀛車きんぐるまのわかきよ手て夜よあけてお變かはり流ながれど眼めになさだしめ  
りて曇くもるがらす窓まどなくや一ひとこゑ同おなじ、ぎすわたるもりや  
さ桂川きつらがは

○全 かさおくる

かさ送おくる糸いとも人目ひとめの關せきかねくほんにしんさる昨日きのう今日けふ部  
屋やにせかれく逢あふとも泣ないて勤つとめの明暮あけくれに袖そでに涙なみだの絶間たへまな  
く晴はれく添日すまひ夜指よびをり待まちぐへ

○全 いろけなうとて



逢あへば逢あふたびな母はは登のぼるけが戀こひのく勢いきほどいん、なづら逢あ  
はずに居いをば猶なほさらふ見みたさ戀こひしよまた増ますばかり人目ひとめい  
とふく目めづかんに招まねく合圖あひづの手紙てがみをへ屈こひて末すえの其そのすへり  
互たがひひお嬉うれえい夫婦めうご中なか

○全 梅うめにむとびし

梅うめの小枝こえだがしととうつる便たより侍間まつだの窓まどのかげこつちややじ  
れつはない胸むねの中なか

○全 花はなのくもと

月ゆいの名所なまの其中そのうちふ須磨すまや明石あかしや象瀧さやがたと田毎たごもうつろふ夜よは

姥捨うばすての和田わだの岬さかや玉津たまつしよ爰こゝは嵯峨野さあまのか三笠山みかさやま田子たごの浦うら  
かや石山いしやまのはきて武藏野むさしのふりてさらしな

○全 いるさめ

春はるさめにむつそり唄うたふ心意氣こころあき我身わがみに似合にあう辻占つじうらや仇あだにたわ  
むれ面白おもしろく互たがにひ忍しのび逢あふ夜半よはの枕まくら定さだめて氣きのひと一ひとツわた  
しやお前まへに情じやう立たて頓とんて氣きまゝ世帯せたい持もちあらバサうれ嬉うれしい  
じやないかいあるサツサつのつるも能よいかな

○やる爲ためめに六むのり書かた玉章たまぢやうのいれていいとせぬ人ひとの前まへ  
はたへ心こころを置おてたつ足音あしおとさへも一ひと筋すぢにもしやと思おもふ氣き

は心こころわたしやむとりの主ぬしままつやがて氣き儘まま身みままになる  
ならばササアア嬉うれしく逢あふトやないかいなサ、なんでもよ  
いいとといな

○替歌 己おのしの國くにさで

花はなの名所なむしよを見みたい處ところの嵯峨さあまの一重ひとえに御室おむろの花はなよ戀こひし夜よ  
櫻平野さくらひらのの社内しゃない、外ほかにいどへ祇園ぎげんの母ははとりしとんがへ

○全 うすぐもり

縫ぬいああげを翌日あしたの着きせい思おもひして夜寒よさむいとわで針仕事はりしごとろ  
れれに引替ひきかぬままさんさんはつれれない心こころどうとくとくななららどどんんじじよよ

の此の跡に恨數々いしじ

○替歌 びんのほつせ

愛想づかしは都合のさめと夫抜お前が兎やこうと浮世は  
お金トや退しやんせ

○全 そいな浮世

すねて去しを何ゆへと呼にやれども來ぬ夜半の梅の實落  
れ小夜風も庭のし抜り戸音絶て思つさ寐の夢ばかりのば  
りくくて逢たらぬ待夜の軒に五月雨の菖蒲の夜もすがら  
しんみ濡るじやないかいな

○新調 のぼり鯉

短夜も。侍身とながくとり。抜ひつ菖蒲もわらぬ。胸のや  
み臍月のうららによくもにて。のぼりつめくの吹流し戀は  
こちしたものでかいな

○全 鶯

鶯や身はさかさはの初糸やふ「木」籠たてさしておふ  
さまらこころのんどのかわかんと道といろいろ梅見州

○替歌 いろがめる

錢が出る承知で乗た人力車を究たのらふと新地までやつ

の此の跡に恨數々いしと

○替歌 びんのほつき

愛想づかしは都合のさめと夫我お前が兎やこうと浮世は  
お金トや退しやんせ

○全 そいな浮世

すねて去しを何ゆへと呼にやれども來ぬ夜半の梅の實落  
お小夜風お庭のし波り戸音絶て思つさ寐の夢ばかりのば  
りくして逢たらぬ待夜の軒に五月雨の菖蒲の夜もすがら  
しんお濡るじやないかいな

○新調 のぼり鯉

短夜も。侍身とながくとめ。波ひつ菖蒲もわらぬ。胸のや  
み臍月のうららによくもにて。のぼりつめくの吹流し戀は  
こうしたものでかいな

○全 鶯

鶯や身はさかさはの初糸やふ「木」籠たてさしておふ  
さまらこゝとのんどのかわかんと道といろいろ梅見艸

○替歌 いろがわる

錢が出る承知で乗た人力車を究たのらふと新地までやつ



てもふにや成ぬ予へ

○替歌 ぬれてきた

知れて死た浮名にたちま人の口いつがいつ迄唄ひめの今  
日といふけふ身と思ひ切實まうせているわんな

○全 ぬれぬさきから

逢ぬ人から彼是と思の跡をとをられて私しや返事もはづ  
かまい及ばぬと知りあがら戀がみれんで夢ばかりせ先  
ておうべふ一日も

○全 あきの夜

雪もよひ小夜吹風の寒かると小鍋だてやら酒の煙つ々つ  
さまし何ぞれつたん音するものは掛時計かぞふおゆびも  
二時三時私しや待さきて氣がも光る

○全

玉川の水に育ちし勇いた強だてに二の腕へ得しやだ  
らの色繪毛の男だてるの立ぬのとまだ悪弊があるぞエ、

○全 夜ざくら

春の夜のやみわゆるやなしと誰がいふと篝火あかさ神が死  
の内外に死あふ夜櫻につどひて開く花の宴あれみやしや

んせわが國の開化の御代の春げしき

○替歌 夕ぐれ

○夕ぐれに飛が先見見たす不忍のむかふに高き上野山つ  
さ出る鳥がながみずへアレ鐘がなるか糸の音と下よ大師  
があるこいな

○夕ぐれを小繩の帯と々炭俵雪のかるのに小鍋だて碎けた  
豆腐が煎るぞへアレ鳥もあり葱もある戸棚小銘酒がある  
こいな

○湯上りに散歩ひやのす揚弓場新造年増の顔ぞろひ見た

よな人が通るぞへアレ素通といひや若ん一吹あがりて  
居らつまやい

○夕ぐれに忍しのんるひろくどつも話もあどや先心  
もせりし好いた同士アレ人が来る物みと戀の邪魔では  
ないかいな

○夕まぐれ向ふ島より我先ふ。竹屋の舟をよぶ聲の。隅田  
の花見が戻るぞへアレ霽月のゆる酔で浮れさげんじやな  
いのいな

○窓明てながめ見渡と庭げしき彌生の空に曇りなく色香

あらうふ櫻花アレ春風が吹ちらす母んに美事な花かいさ  
○夕ぐれふなが先見渡す不二筑波雪の肌はたへに紫あすみの霞あがの帯おび  
夜しゆめみるぞへアレ鳥とりが鳴く歸かへる尸かみ都みやこの名所ななしよのこゝじやエ、  
○夕ぐれに人目ひとめしのんでしみぐとつもる話はなしのむつごを  
を身みにつまされてまよんばりとアレ聞きかしやん勢いきりあつの唄うたは  
はれて逢あひれぬ辻つじうらか

○替歌 己がもの

○我われものと思おもひうめにし彼あの人ひとと戀こひの意氣地いきぢでわられて  
も妹脊いもせの縁えんか忘わすれられを焦こぼれくして焚たく蚊遣かやひまたの逢あふ顔かほ

夜待よまつつらと實じつに廣ひろき蚊帳かやのうち

○我物わがものと思おもはば輕かるし國くにの税ぜい民たみの負おふ荷にを肩かたに擔かひ廣ひろがり  
行ゆけバ武備ぶひの用よも海陸かいりく共に不足ふそくなく守まもりを盡つくす君きみの爲ため實じつ  
に恐おそれがないわいな

○おのものと思おもふてゐるにいつの間まか先さきの心こころはうれなら  
る深あふんに飛鳥あすかの世よの中なかやかあらぬ袖そでのつかの間まもあする  
とひまもないて居いるじつよしん氣きなこをじやいな

○秋あきの夜よと思おもへばいと肌はださむく戀こひの妻つま戸かどにこどくと  
首尾しゆびして行ゆは月つきの影松かげまつ吹風ふきかぜ乃な枝えだもれて恐おそぶに目めだめなく

つもの申れてこぼるゝ草の色

○替歌 也かまのゆる

○ぬれて色よき海棠のそのあだ咲もむとしはにまぶたや  
そまき庭の鉢いけまか見とまうかくと日暮と知らせ居  
たむな

○全 ゆきのとこへ

○鐘の遠くみきまゑけりれんじに残るありあけの君をむ  
るひの車やが心落しい別れ路にまだはなし残しがある  
わいな

曼

○今のたがひみせ死せかれ飽れぬ戀乃中絶て一寸の首尾  
を忍ぶ夜は明りもくらさ閨の内苦勞しようちを惚の中

○月の雲間ふさゑわたる夜半に風の物すおく主枝まつ  
身の閨の内遠音にひいく鐘の聲まだ寐もやらぬまやない  
かいな

○雨はしだいみ降しさるかいは道のしるべにて蝶と千  
鳥の對衣裳敵枝ねらふ狩屋うちまた年よりいじやなぬり  
いな

○月は次第に高くなむ首尾をまつ間の小座敷み一人なる

寐ねの肱ひじまくらひき出す鐘かねや虫むしの聲こゑテモ恨うらめしいじや取とり  
かんな

○秋あきはしだんに深ふか久くなる落おち葉ばが首あたま尾びのしとねふて逢あふと  
其そのまゝ肱ひじ枕まくら置おかれてい來くる小こ男おとこ鹿かのまた借か老ろうと呼よわいな

○雨あめの日ひおとに降ふちたる入つ梅つばなの互たがひの上じやうじゆび首あたま尾びる主ぬしと妾めかけの  
深ふかい中なか晴はれれば歸かへる浮うき寐ね鳥どりマダあたまらぬじやなにかいな

○替歌 おとしぶみ

○いざ方かたへ書かき送おくるらん結むすび糸いとあだし心こゝろれ迷まよい路みちひらいて

見みまはなけかし君きみの初はつ音ねの心こゝろちして戀こゝろれくして恋こゝろふ身み  
に神かみの惠めぐみや有あり明あけの月つきをへさゆる胸むねの字あじち

○全 つゆとあばな

○糸いとの便たよりのしたといふ便たよりの糸いとのこぬといぬマレたとい  
ふまぬといふ便たよりが忘わすれて痢ぢり話はなし喧けん嘩わ

○遠とほざのりヤやささたと思おもふか淺あさ慮はか者ものめ人ひと目めありやこそ遠とほ  
ざかる

○全 月つきの字あじには

月つき夜よ見るには名な所しよがムる一いちに石いし山やま二ふたに明あけ石いし瀉た三さんふ三さん笠かさ山やま

四に須戸の浦むかしア武藏野松島田毎焼捨山こころばそてやまのよきまを  
も捨るとはぬ字が氣きにのくるサアサ詠めは夜よるじやいな

○全 おぼろ夜に

○山の端に姿を夫と母のめたてたしかに月の面影を見る  
のひもなき雲の邪よこしま晴はれて逢ふ夜がまぢ遠としい

○全 四季のながめ

○梅の花笠柳の糸に、縫も色めく花の雨、いはう若葉も紅  
葉の秋を、袖のにしさに柳はらふてうけて、いや白妙しろたへ乃色いろげし

さ、四季の望の酔よめこゝ後、よい芳町よしとじやないかいな

○替歌 かうもりが

憲法けんぽうが出たのゝ人の大嬉おほいア町中まちぢうサット日の御旗みはた花車はなぐるまや屋  
臺たいや大花火おほいはなびの目らぬくいの迄まても花の都はなのつさぬ賑にぎはひ

○全 空めが主なあら

己おのが己おのなら妾めかけしと妾めかけしわか他人たにんと知らぬのあ有あよこれ  
でもかあい人ひとの心こころをいぞへ己おの等にら

○全 しのぶ戀路と

藝げいのない身みのサテ悲かなしとよ酒さけの座敷ざしきふばんやりと連つれの遊あそ

びになふられて退屈かくとつやみ食

○替歌 月雪花

○としといふ、名は誰づつけて三吉野の、花のころより水  
もと志人氣もよきや月雪の、中にさ川日の立田みも、しら  
ぬ翠乃若楓、やがく錦のもみぢ葉をうつろふ、世にもうの  
ろわぬ、堅ひ誓ひの石だ、み、解て結んで又解て、三の望  
のろの春秋の、よみ芳町じやなんかんな

○全 春のゆふべ

の梅の夕べに主さんと手よ手みかれて仲の町ついとよきな

まに引どめて保んふ嬉しい此逢ふ瀬

○全 花のくもり

○四季の雨にいとあへがムる一に春雨二に夕立三に五月  
雨四に秋の雨傘をさしてみ時雨ふ濡る濡るいぬのよぐれ  
ともふるどふいのが氣ふか、るサツサなんどせうどら好  
字どへな

○替歌 おぼろ夜よ

○忽ぶ夜は後見らる、月の顔兼おあいつの咳拂わざと人  
目の頬かぶる

○ゆたかなる春を美顔の福壽洲根に葉に思ふ主づの身の開く時節ぞ癒えけれ

○全 かさおくる

○吹送る風にちらく散花の思ひせぶりか知らすのか顔を穿るさくそよくと謎か思ひか思ひか謎か晴ぬりしたの上野山鐘も曇りにまもるエー

○全 梅にもはるの

○埋地も春の色ろへて若水汲か廓井戸客も訪りした貸座敷洲崎にしげき容足の日の出をおがむ千代の春帯間藝者

のぞむぎ唄みな茶屋し字か鼠なき晴てめでた記御代不知る

○替歌 身はひとつ

○木ハートツ咲ハート重八重櫻詠はわかぬ歌人れ来ては現れ歌枕明ゆゑ方のなをおしく花やゐる木の木したか少

○全 かさおくる

○糸遊の空に三すじのひきやめやないてみとどの初聲がねぐらさううて鶯の思ひかほるか薫るの梅かはれる木



の間のをばる月かげも今宵はくもたエー

○全 花のくもり

○春にあそびか沙千狩りさかあざりか蛤の中とりよく  
吹沙風に顔や手足の日にやけるここの臺場かお濱沖女浪  
男浪の打寄せる音がはげしき沙ぞのげしき

○全 梅が主なら

○主が舟なら私が水よ甲のよいのをうねむのか霧る日に  
包か小荒浪よ心なほぞへ風のふく  
○梅が咲く柳か青む中のよいのか気が合か雨にしりば

り濡いろの月もさつして雲がくれ

○替歌 むらさき

○何となく淋し後秋の夜もすがら遠音にひく鐘の聲ふ  
きてこぬとは恨らしい胸のくもりよ涙雨こころを忘れて  
儘ならぬ秋の空かやさるる雲晴くよくらま月の顔

○全 玉川の

○泥水の中に育ちし杜若ぬしが根引の其後のなれし素人  
のおいの髪見すてられづに放きつに中よく年を取ゾー

○全 己がもの

○我ものと思へば長舌鼻の下なびく女をかねるわけ車を  
ゆけば相葉の落行先の濡て泣く聞身ふつらき奥座敷  
つに阿房トやなにかいな

○全 梅にもとるの

○軒にも張し繩しなな若松建やかと飾かた音も賑はし獅々舞  
や空にもなびく日の御旗往來もしげき門禮者初荷車の景  
氣よく數つく羽根はね風いかのぼりよ空て嬉しき屠蘇とろさかん

○全 びんの母つれ

○金のゆび輪ゆわ之且那たんなのかたみ夫ちれをね前まへ入いれあげと困こまれた  
弱よわいさどうしよ空

○字その涙は手管てくだ乃なあよ夫ちれをお前まへが真まに空ありて情人氣  
取とりとどかしやんせ

○泣なて居いちや分わからないや糸いと知らしかい事こと取とら仕方しちたがなんや  
ね何なんでもないのに氣き夜よ揉もむお前まへの罪つみがない (字あまり)

○けんで負ませばお酒さけを吞のせ勝かてばみんなにみなににおめらせのや  
ちないくよまなんせ

○錢の無いの私わたしの常つねよりきをあまへに借かりとられ餘あまりじやエ、むたいじやエ、ゆるさんせ

○全 くせつして

○辛苦しんくえて思おもひの細ほろき詫住居わすまゐねやの睦言むつごお互たがひに又解またきやらぬおぼこ氣きの亂みだるゝ主ぬしの浮氣性うきせう觀音くわんおんさまへ日參ひまゐりもたうせども無い身みの浮名うきな

○全 ひらさきれ

○娘氣むすめのやの字じは結むすぶ唐繻子たうじゆすの解とひぬも色いろの櫃紅葉松ぶつこうまつあわらしの紙砧かみせ捲まて打うち込こむ鴈かりの文字もじ誰たれが便りたよりの落おし物もの憎にくい

可愛かあいの裏表うらおもて苦勞くろうをるのも戀こいの情じやう

○全 本てふし

○紀州紀きしゅうきの國くにみかんの出所國でしよこくにを立たつとさや馬うまやかお長ながの道みち中舟出ちゆうふなでしてのじめて都みやこへはた時ときの大店おほみせ小店こみせをさらされて番頭ばんとうや了雅りやうがに買かひとらせ色いろづ死しやのだかよあらされる

○煙艸たばこ同士のいふ言こときけば初手しよてはとられて拈あらさきて切きり刻きまれたろの上に賣うりて買かひれてひねをきて末すへと火蓋ひまたの攻せめ苦くさへ爰こゝがぶよんとしのべども輪わに吹煙ふきけかりと立たちさゑて阿房あほう脚あしとの曲まががなぬ

○全 ひととして

○ふつとした事からこふした中とあり義理といふ字にか  
らまれて切に切られず放られず晴ぬ戀路の此苦勞ならば  
女房にしと係しや

○一寸寐て起れば引け乃鐘の聲いそいで立ば小女がまた  
袖引ておいらんに叱られ升よも字少しマア落付て貫ひ度

○どうぞして今宵の主に逢たさの思の丈けをこまくと  
又書てやる戀の糸くると返事がしてはしや

○さつとして吹來る秋の夕風に香ふともなく香ひくる籬  
にみだれ開く菊さらば手活にして見たや

○ふつとして登ればはまる世辭の淵さわざし霄の酒の氣  
をいやさめてくゑ勘定沙汰ならば今度おしくはしや

○じつとして眠りもやらば一人言こがれま主のもの思ひ  
ふ更てゆく床の内ならば夢おも來て同しや

○全 なみだかくしく

さつと見ゆめて聲をもらせて母んに主のマノ瘦よふはど  
いひつゝ立て勝手さ巻土瓶片手ふひきとげてもしよらん

せお薬をくすり

○全 たま川のがは

玉手箱たまてばこあけくくやまき浦島うらなまがくもね心こころや顔かほのしと髪かみを白しろ  
髪かみの元結もとむすもとくに解とれづ其そのまゝみ又またくるとしを待まちどへ

○全 初音はつねさかして

尋たづね来き見みよ信田しんだの森もりや人ひとの心こころも白紙しろがみへまこと知しらする  
いしり書がきよ、いぶかまゝいざれが誠まことか狐きつねが人ひとが一いち寸すん一筆いっぴつ  
のよす文字もじ

○替歌 露つゆのおばな

糸いとの便たよりいしたといふ便たよりの糸いとのこぬといふアレしこと  
いふまぬといぬ便たよりがわすきて痴話ちわらんくじ

○全 春はるのゆふべ

花はなよ嵐あらし乃なりいぢわるな浮世うきよのぐれて二人住ふたりむ賤しづが伏屋ふせやのさ  
びしと心こころなぐさむ鳥とりのこへ

○全 ちんちん

紫むらさきのゆかりの色いろのこゝ中なかも人目ひとめの關せきに隔へだてらる仇あだま心こころが  
あさぬかと一人ひとり苦勞くろうをまねわいな

○全 艸くさの葉はに

辻占も来なれどあたる折も折、落て丁子のばさくと首  
尾か不首尾かくか首尾か晴きて逢ふ夜乃語りぐさ

○替歌 つゆのおばな

秋のたよりの桐一葉紅葉に鹿の落し角アノ桐一葉鹿のこ  
ゑ落るといふが氣おかゝる

○替歌 空すづみ

五月雨の降るつれぐに待わびてしんき紛れに乃ぞく顔  
吐息でくもる鏡さへ、晴ぬ心をしらむのか、エ、モ憎ら  
し寫真まで、母んに胸はでくもりがち

○全 はおりかくし

襟をつく袖ひ膝たてあ残しど穿るも主の罪な人といふつ  
と聲を曇らせて目にもつ涙恨み泣アノ察しやんせ我の苦  
勞

○全 竹になどたや

小指になどたやお前のレコお朝の永寐に晝は留主晩は二  
人で一ツ床 氣樂なわび住居

○全 雪とともへに

主は憐に二人づれ調子もいさる瓜びさみそつと人目を忍

びおま又氣ふかゝる痴話ぐるひ  
口おしいじやないか  
いな

○替歌 玉川の

○景清のうらむ源家乃奥ごてん琵琶の調べに小櫻れ責る  
もゆらき母親にうれと兼備の重忠がさどる平家の残黨と  
出合ふ時せつをまつ不エ、

○吹風の香とはこぶや庭の梅あつき氷もいつの間お解て  
霞どひく山の端に聲もあだなる鶯の又咲ゆるを待不エ、

○替歌 四社ふあまます

○四社にあります住吉さん岸にとる浪くは裾みぬれ  
かゝるそきそりに濡かゝる見やれ嶋山出て見やれ嶋山出  
る見やれ月の住吉と名所でふるエ、

○全 なるぞし

なる丑夜祭りてたのむ嫁れつあるがて嬉しうくらとやふ  
神に願をのけ巻も果報まつ身ハ一節に寐ても起ても忘  
らせぬ

○全 梅がぬえな

とつぎの實ならわたしは斯どむぬの誠も打明くある夜ひる

かみ契るをりふふろないぞ論明がらそ

○替歌 川なみふ

卿の葉と夜なくごとふしとふてもまふならぬ籠の  
虫つらいくとなき明を

○全 春ものどかに

花も盛りふ隅田川流る、水のあらふちを錦にみせる春風  
はほんふ嬉しの森かいなア

○全 あきれ夜

夏の夜の短ひものはしりながら月すみわたる今宵かも

更てまてとも田長鳥おとのふもれば松の風とや有明てい  
るわいな

○新調 本てふし

○五月雨や獨り淋しき物思ひやうか誠か去逆も主の便も  
ないじやくり血を吐聲は時鳥アレ時鳥なつかまや暫の姿  
かどまや見さい

○時鳥ないて別るゝ曉ふさ替る羽織の衿さへも歸まど  
もなき心をば小し察して待さんせアレー。またつさいな  
す明の鐘



○花おれみ心迷ふも。昨日とすきて。今と互み隅田川おく  
ひ嵐もいほしかに。早すいしみの卯月空

○茶のどがに寐られぬま、に瓜弾乃根が川竹の浮てふし  
なみだに濁る宇す月の傘もつはどぞやなれども 一中節

「曇りがちある我むねを晴らす雲間の係と、さす

○世は車月日に勢さはなたもの不幼さとさに怠るれば老  
て悔めど詮もなし勉強なまのいれもろ人よ

○谷川の岩のいざよの櫻花をしや盛りも山彦の外に言信  
人もなし保んおのかなやひと里咲さ

○しと云ふ文字のつくのもさまぐや太閤秀吉木の下  
でザラくするのは猫の舌をたしの好きなど臍のした

○うた、寐とツイろのま、ようしろから小夜着をうほと  
るなまくも神に誓ひし人じやもの首尾して逢ふた嬉しさ  
は起したい氣をたししづめじつと見つめぬ横顔のエ、マ

アじれつたい程好た人

○千鳥赤く加茂の川まづ音さへて遠音よさゆる三味線の  
根じめに心とだきつ、アレ霜夜らしいとあくゑ窓うつる  
すびたど東山

○こがれなく虫もあわれな秋の夜に聞て我身に泣はされ  
て 秋は夜「更けてまてともこぬ人の月見ぬ人の心や音  
づるものは鐘バかど敷ゆる指の寐の起り」なせふ男は實  
意なやまとてらすの月ばかり

○月と知るのやわが思ひ夜ごとくにまつ身のつらさ  
んさしんくみまた今晚も影とそひ寐の閨のうちアレマア  
鶏がなくわいなア

○アレまゝしやれせその短氣のけを聞かんせこれちの  
人死ぬる此身はいとねど

○しんきささのふし煙草の煙管さへつまりがちなる憎ら  
まさ徹すこたしの心から捻ることよりも主の身

○ささむかひしよ手は嬉しう思ふて居たも夜更の更もさ  
しんぐと最早時刻を思ふうちこんどつた出ま鐘の音に  
もしへ車がまいたりましよエ、モウしんきな車屋じやま  
く逢ふのを知りませで

○君のかへりを待たむびくろぞへる間なき時計の音に心せ  
かれて寐の起きつまたも聞ゆる曉乃鐘エ、もまをたたい  
ことサエ

○おもてむきされて居れども眞實はなんの野夫らし今更  
 に主はろの氣か知られども妾まやさる氣はないわいあア  
 ○逢見ての後の心にくらぶきは思ひぞやさるさのふけか  
 いつそ他人であつたらんこれ様くるふいあるまいによがれ  
 死ぬとの出雲の神がほんに仇やらなさけやら  
 ○蒲團着て寐たるまがぬや東山ぼれぬくもりは嬉しさを  
 包すらをともものかわすらをぬぐちよさん込らん瘡の何  
 もりくして雪のいづアレ見やしやんせ池の鶯陸まじいれ  
 がうらやまし

○深なるほど戀しさにたぐ一トすじお思ひ詰ぐちといわ  
 ずにまた逢までをあんじくらも知らぬ主心づよんもエ  
 とほどがある  
 ○花にやつ主のこゝろと八重垣のめぐりくして逢まで  
 なかのよいのかぢらそのか女子心の一筋お道を通して居  
 る可いな  
 ○加茂川は水と雲間よてる月はさめる心をうつしてや鏡  
 のかけのやつきしおびんのみだれの思ぐさ袖のかはりの  
 残りしをほんのやみよの楯の戸にかゝると雨のうさ涙

○人の思わくなにはいからう世のことはさふある通り色  
の思案乃外といふしのび逢夜の度おとに憎あふた来る小  
夜あらし

○しつばりと春夜とのしむ櫻がり今日も飛鳥や日ぐらし  
の二人手よ手を都鳥身にふと加ゝる花の雨はきて嬉々さ  
隅田の月

○泥水のつらきつとめ城主さんに小しありとも知らせた  
やまゝに逢れぬ籠の鳥エ、さざな容情夫きど寝

○うた、者の迷ひかさぬる主の夢をぬる後も物思ひ誰

が問はホや軒の雨したりか、げし糸やの燈も暗た心と知  
りもせせ二人ならべて女夫まね夜おと淋まぐ片やくら

○三日月の頃とり待し今宵こゝ世間はれてのむつ言も空  
おとあらぬありし合ひ曇りあき身の中くは思ひふさへ

し胸の内

○武藏野ふ晴をふたりたふ十六夜の月もあらずか白露れ  
もる、情よさびしさとそゑる松虫鈴虫の中に縁ある響虫

○十かへりの、繁る枝葉も深みどり、雪にも松乃色かへぬ  
常盤のさうろち千代こめて、直なる竹の影そへし月の露さ

へ玉だれの内外ゆのしきそよぎぶり、梅れさ死がけ梅ヶ  
香と、四方みつたへて芳町や、盛久きさためしなり

○夕貌の花にまたいる露の玉弦月の影くらく通ふりしく

忍んを聞べたきつ白波立田山夜半にの淡とがますぞへさ

○夜ごとおもわゆる枕れつれな死や身を川竹へ沈めさも

皆主由へとゆきえ死て勤さる身もま、ならぬ實に苦界と

やないかいさ

○のく狩も、涙ににじむ繪半切をかなき愚痴と女氣の亦

くりかへし巻紙に心を細き氣のさやことへ、先から切を

るとも、私しや命毛のつくと迄

○小夜風が閨のとびくと叩くさへ若やと思ふ御練かふ明

て耻のし月の前

○月の夜に見送る道もうかくと躡く石に握る手を放し

とむなみ別をさぎと

○夜ごとおく露の情を身に受て色も増穂の花芒月にはな

れぬ中のよき

○抓らきた腰お董の花咲く番ひはあれず蝶くの舞ふや

狂ふか夢心

○腹が立は今日を私し汝古池や主の心が蛙ゆへいつもお  
顔を水の音

○梅を見に誰も廓へ黄子鳥ホウ法華々ふも居續けお泣き  
笑ふも容と情夫

○せかるればせうる程に會たさよ勤の中の筆みも戀の  
水瀬お越と人眼

○一寸香を慕ひ初めて狂ふ蝶秋來る末に添ふ様と嘘  
と實の菊根わけ

○戀しさよ積る思ひをかさつぱたとくに解たぬ筆のあや

よんを聞たい女郎花

○春雨や橋間にもや字舟のうち仇を二上り三下り人目か  
糸での忍び駒

○いやだといろりや幸ひの切言葉それと知るからわしぢ  
やとて色の候補者があるおいあア

○全 一上り

○來さばお前よくと義理で來たのか嫌なれり妾は  
言葉も聞もせせ聞わ時計の敷ばかり

○全 一上り

○ぴんとそ締てはまたいろうたり苦勞くろうしたり泣なせたり  
色の世よの中苦なかのせかい

○替歌 あさくとも

浅あさくくとも深あかに契あきりの深川ふかいがわや洲崎あまざきに集つたふ濱はま千鳥せんじう浮々うきうき遊あそんで  
居いるつがひ美うらやままてとないかんな

○早はやくとも歸かへさふやならん主ぬしさんと積つる苦舌くせつのきぬく  
お送り出おくりだしふる段たんばしで鶏とりのも鳴なるひないかいな

○鳴鐘なるかねの敷敷をかくして引止ひきどめる人の心こころも白髭しろしげの森もりを放はなれて  
鳴ならすにくらしいふひないひんなア

○寒さむくとも飽ありぬ詠うた先の雪ゆきげしき誰たれも來きて見みるまゝる山やまに  
今朝けさも爪つめ弾ひしんねあそホホニ愉快うれじやなひかな

○くさくともぶつとり肥こた尻しりつきに這はふと行ゆ氣きのぬれし  
ごと這はい入れバ蒲團ふとんはあみがさの顔かほは醜みにくひ相摸あひま下女げによ

○あさくとも清きよき流れのみづか々々み字じ句くれば變かはる人ひとこ、  
る况まして男おとこのむねのうち寶たからにやるせがないといな

○おろくともお歸かへりあされとまらづと主ぬしも何なにと先まのお身み  
のうゑ今いまいたがひのしんばどこあかぬ別わかれも末えへのため

○全 ろいあんま

○アノ見やさん勢明り窓ま、よわさ日は高くせ毛はなれ  
あいぞへ今朝の雪

○アノ待しやんせ歸おるらま、よ浮名が立とても歸さな  
ぞへ此雨ふ  
春の家

○新調 本てふし

○思ひをばあけてい言とぬ胸の戸やうかぶなみだ夜頭痛  
にしてとかれがたなきさゝくもかへして後のうつり香  
にのたこの夜着のいだざわり嬉しつゑみのふた道が骨に  
しみこむ此やまひ死じや根たれが拵ぬわいな

○替歌 つゆの尾花

女郎とお客の酒といふお客の女郎の盃といふアノ女郎と  
ふふ客といふ樓下のお客といふ助さした

○全 ふりてあふ夜の

たまに逢夜の氣苦勞の目夜忍び待合の互ひあ心奥二階  
目にたつ床に結柳のエ、やつきてか髻の毛やはなす話も  
あぞや先

○全 しのぶ戀路わ

一人寐る夜のサテ淋さよ今宵逢ふとの約束に待問程な



くさぬぐのりの鐘うちむ無理な譯

○全 ひつとして

かつとして互に好た惣た同士命をかゝて身の誓ひ又逢  
ひに行親のうげあらば夫婦に仕てばまや

○替歌 鳥のこゑ

主の聲連の言葉も身おこたへいと嬉しき胸の内おぼは  
心のとつおいつ思はせぶまか人ぢらし

○全 かにまよふ

降りしきる賤が軒端の雨宿り簾笠あざとことわるも口無  
し色の亂き咲き浦山吹の耻しくまだ解々やらぬ髪髪の毛  
はつれ掛りし物思ひ一夜よ千代の情こめく君がなさけを  
請ぐの後枕わびしき事ばかり

○全 とおりかくまて

雑誌かくして袖引きどめて同でも是れを見さんすかと言  
ゆ、たちて取りぬだし惚氣醉士といふ於人これ見やまや  
舞勢この寫眞

○全 かけてあふ夜

侍にまゆふる千歳座は初日もすんで景氣よく土間もさじ  
さも人の山前かゝ茶屋へ附込ふエ、いち悪客留と早く  
私し來たもア夜

○全 宇治と茶どころ

主の氣やすめさまぐの廓にうかれのいついけ沙汰と人  
の氣茂もむ噂も色も雅もある好た主粹ふや浮身もやり  
しがちコチャく小指のやばドやいな

○  
にこいど大根ださにてん戀と情と色と慾みつのお山は熊

野さんあさまがだけは淨るりのはんごうかうの仇文句あ  
たおいあいさとう守神いづものぞんじあん結びすいみ  
は貴舟ごのかみいこ出島いつくだぶしとみが岡にい  
わしみづ洲崎にべんてん藝者のしゆおトんためうめうけ  
んだいばぞつ風おもなびく柳島水の流と見てくらす

○はやりうた

○とまへ廿一

とまへや廿一いちちく私まの十九。四十中よくくらす

ならくもうかいく霹靂一聲夢をめて迅雷疾風。くも  
パークく

○玄關げんかんにのたるアノよひげん合羽かつばエーシヤないの玄關げんかんの

げん合羽かつばの源八げんぱちのげん合羽かつば

○神戸かたべよい處ところじや盛大せんだいの港みなとエーシヤないかあまたの異人いじん

がチーチヨツチキーチヨツテ

○岐阜ぎふのよい處ところじや金花山きんかざんのふもとエーシヤないかあま

たのうわづがナイイチヨツチキーチヨツテ

口鼻

をたしや鬼おにならお前まえさんをのーんで一ツのらだに去て見

たいコヲヤートチーヨシアシチチヤカボコチヤく

○いざり勝五郎車かつごろうくるまにのせて初花はつはなひーてゆーく箱根山はこねやまコヲ

ヤートチーヨシアシチチヤカボコチヤく

○戀こひのちわ糸いとかすみに千鳥ちどり及びおよびないのよ戀こひをするコヲヤ

ートチーヨシアシチチヤカボコチヤく

○

○銅貨どうかのいれたるアノよい錢財布せんさいふエーシヤないかせいの

銭取橋のせんだんさんのせんざんか

○和服はいやだと洋服が好きよエーズボンヌマンテルはいチヨツテキチヨツた

○

△鳥がなこが夜のおけよか憐のばさん茶々たこが障子にわかりのさしたとてお寺の木魚のチンモクくムクくくくとならなけや歸さぬ。なせエなじようろトやげなせゝるんぢのステヤカチヤカステドーンく

○

○琉球へおぢやるな〜草鞋よはいくお〜ぢや〜琉球は石原こひしわら〜シタリヤよめく〜し〜ぐんく

○

鐘もさこへぬこの山中おドンガラガン主と二人で寐て見たいうこのつきやドンガラガン

○仙臺ぶし

佛蘭西革命の起因を問へば天さだまりて人に勝運の月かよ月魄も、盈ればかくる十六夜の、まご年若のルイ王が、お月の貴族にまどわされ、黒白もどかぬ慾の闇、擁利

のくろかみひきまばり、専制の櫛齒手あらとも、民の油液  
 すきととて、天下の患を白妙の、塩の税まゝあつ化粧、顔  
 の白くも腹黒く、からき政治を解かばへに返はてむすぶ  
 袴かざり、咽喉めるわざりとも、月日と共に増のゝみ、と  
 ぎすましたる竹槍の、切先ろろふむしろ簞、上を下へと翻  
 がへり、萬國一の名ふし負ふ、バリーの御所の有様も、忽  
 ち變る修羅地ごく、血まはの海に屍山、捲らふく風もなや  
 ぐさく、一時の身の毛がよだちしが、嬉しや髑髏に、ヨリ  
 ヤナンダイ自由の花―

○ヤーサーツキ

そのまた憐の馬鹿者よつまやうじ賣にやつたればつまよ  
 うじ賣聲をすれて一寸五分のすてつきなんどはいらない  
 かとふれさくどとヤーサーサーツ  
 そのまた憐の馬鹿者よ嵐山賣あやつたればらん山賣聲を  
 すれて大佛さんのはち山あんなぞいぬらないかどふをたれ  
 どヤサーサーツ

そのまた憐のばの者に梅ばし賣にやつたれば梅ばし賣聲  
 わさきておのんこのつ〇紙あんなぞいらないかどふをた

くヤサーサツサ

そ乃又憐のばる者お割木を賣にやつたれば割木の賣聲と  
すれて大佛さん乃のまよ字じなんどはいらないかどふき  
さくヤツスサアサ

○ほんだく 二上

ほんだ通すりや雪がちらくか、るか、りや妻子がま  
しよきにかゝる是のまとのほんだく

ほんだくほんださんのでもん丸に三ッ引ないまよ三ッ  
葵こぎまとのほんだく

○こんどまのたび

筑波の國からわしやとるくど父をたづねて紀伊の國石  
童丸は一人母のばだいをとむろふてかぶとの宿で名  
も高た玉屋よじべをやど、して九百九十の寺々を尋さが  
せどつゆあむづろれほど戀しい父上をすみぢめにしくく  
れた全体こう屋がノーホ、エーとかりやアーせぬ子ー  
年の十三●●ばち娘子さつきのない我とばお梅くと引  
よせてお前のまへなる橘よ椿の花をばつらてぐつと挿  
ゝるその時は眼のしとばくさんしく花口は水仙玉椿お

て、をしつかとださ若荷こしはゆらく百合の花あーは  
 きり、と藤のつるうのとたお前の心とんすふや一生二生  
 とゆておいていやすらさびの花が咲たどく縁のさとしま  
 どわノーボ、エーうちが無理子ー

○たんで宮津

戀のどんゆる岩おもと字と中の互ひのきんがまーく路水  
 の水をばひんぞ出し石山堅田に膳所乃城三井寺からさき  
 比良の雪あおづ松原勢多乃橋めいしよく  
 けふの唯今諸君のまーへーでーたんで宮津のうたをよー

む丹後の宮津るびんどだした

早野勘平さんいみのさく笠きて鐵砲かたかて火繩に火を  
 つけしうちやごしよさばい廿四のまへやく三十の命の  
 終かといおかるさん顔べつびんまとおきれいお苦後家  
 と播廣の港でまやんとくさびしきや私しが通をまーす  
 ぞくないーよく

下に主あさ二階におー容ッあがふだんばまごがアーはり  
 の山たんぶのまやづでびんどだした

思ひがけのぬ且那かおなごしこーかー落のるぬ且那なに

あはばす馬のりぞめきはならぬあは馬うまたいあてとんとく  
おゑさんつげます申まをまますとくなくないしよく

○ふよぶし

こがせくして寐ねむもゆかす主ぬしと今おろどうしてか硯すずりひ  
死しよせなんとかいたら戀こひしくの此胸このむねが赤あかのもん句くで屈まじ  
くやら筆ふでなげすて、ア、まん死し曉あけの鐘かねおんと身にしむ封ふう  
じこんだるうとがさにたまーいーるウ、

○ちやり舞

○替歌 かつばれ

「軒のきの高たかのの——うに國旗こくきの見——ゆる是これの憲法けんぽうウ……  
式祝しきいめひ發布はつぷだく萬歳ばんざい歡喜よろこべ 「豊年ほうねんだ——雪ゆきが降ふる夕  
ふの旦那だんなのゆ馳走おふるまい酒口さけぐちから出る迄まてたんと澤山のん飲のんだ……サツサ大  
都との日本にほんは中央まんあかだ……高たかい枕まくらで結むすぶゆめこんる大典おまつりの見み  
た事ことない……セツ——一學いちがく。二紙幣にしへい。三が知惠ちゑ四ト五は  
電信障子でんしんはじこ掛可愛のりかあひなすめ娘むすめを權ごんにして下したから胡摩摺こますりや諾にやんのこ  
とは姉ねへ

○替歌 きんとさ



何時なんどきだく揚枝やうぢ片手かたてに齒磨はみぎを以もつて髪かみや化粧けいようの仇あだすがた朝あさ  
 起おき十二時じふにじ藝者屋げいしやの常つねいつも旦那だんなのお約束やくそく神功皇后じんこうこうごう武内たけうちの  
 紙幣しへい遠出えんしゅつ人力じんりき祝義しゆぎ奮發ふんぱつ唱法しやうほう家業かぎやうや浮氣うき沙汰さた若わかい時ときア二  
 度どとい無ないから澤山たくさんお勤つとめが勸進くわんじんでアリ升ますよ

○同 沖おきれくらいのに

○私わしのとなどに娘むすめのある年は十六はな花はなざかり ヨイコノ コレワノサー

○棚たなのお皿さしお菓子かしがあるアレはよい物もの旨うまい物もの ヤロウカヤ ルマイカ

○朝あさのくらいのに車くるまが通とほるアレハ吉原よしかはら朝歸あさかへり ヤレコノ コレワノサ

○替歌 沖おきの大船

○沖おきの大船おおいせんナーいろばたの三十三さんじゅうさん反たんの帆はたまたあかて花はなも  
 舵かぢどり舵雪嵐かぢゆめあらし向むかふれ島しまから女良衆にょらうしゆがい出でて来てまねくやら  
 船人衆せんじゆはみるよどろ立たてる舵かぢをざんぶと湊川みなとがはよかねーと  
 かく

○謠 高砂たかさごや

か、様さまや此この紅絹裏もみうらに垢付あかつきのぼろもろ共ともに風しらみだら春せむの縫ぬい  
 目めや掖わきの下した痒かゆくなる故為ゆ脱ぬぎ捨すて早や釜かまの湯ゆ枝えかけふら  
 ーりーく……

立山ぶし

二上り

おまぬ。ゆゑエーなーらア、わしやどこチーやるエ  
 もとへ野の末エ、虎ふきのへも賤が伏家ーるや、もた  
 めーりイー縫針手わーアーざア  
 ふくひ。男とチーうらんをぬれエーど。一ト人寐る夜のチ  
 、寒さチー志のぞ茶椀酒エーから。ツイ逢となれ……  
 おなごり……みれんー

わしが。心をしらぬるかア何れ日よちはぬーよち思わ

せおいて。義理に逢とーチーのあんまりむごひイーつれ

なぬーおとこチー心チー

人に。なぶられたがねをーしり立山アーさんエー願か  
 々エーてエ茶だちそねのもわたしやおまへ思ひういーた  
 いイーばかりー

大津繪ぶし

○呉服と木綿

主ふ少しもあいまじん愚痴と結城トやなけれど。さら

してニマ子も有中る。ホンニ心も浮織やどうした黄縷子  
 る居るのやら。日々に家業も綿甲斐絹家を外へと飛八丈。  
 真岡いるかと松阪や織々の。世間の人よのぢ晒し辛苦も  
 水の阿波縮さきるとの性が悪ひとやなんかいあア

○

一寸おやはん待なんし妾のいふれを聞なんし爲を思へば  
 意見するいやな奴でも來きバ客ろれもお金の目當申へ二  
 日三日の居續りも無理おすゝめてさせもしとふ二會や初  
 會じやいざ知らぬお互ひよ三會かさねた中となりなんぞ

嘘などつたまホウ

○端字たの川づくし

是の葉唄の川盡し嘘と誠が二瀬川思わぬ戀に及びせ川絶  
 老一人を思ひ川盡す實意も白川や逢ふも此頃玉川を積る  
 思ひを夕暮に逢へバ心が隅田川顔にもみぢの立田川互ひ  
 おピツシヤリ大井川 二上り「あすと云ふ日が無きやな  
 し是でおやとん寐やしやんせ」も志へと枕笈引寄せて脊  
 中じやいやじやと柱川

○薪の小言

薪同士の云事聞ばわし程因果な物は無い産を立うら山育  
ちヤット生長た頃枝葉のさらす切とくき罪もなんの  
に繩掛軒積れて雨ざらし椽の下へと押込れ太い奴  
だど引出さを水責火責に逢ふのなす堅木で居たのが口お  
しい

○玉子の道行○炭團のお化け○闇夜の月○茶碗  
の行列○鏡の愚痴 五題

鶏卵同士の戀ひ中は互ひふ手に手取取かわし月のないの  
を幸ひにソット人目を忍び出や世々んの口には蓋茶わん

列べて水を洩らさじと古卿へ飾る錦出の赤く成る程くる  
うして居たものを一夜も家へ歸りや拵ぞ胸のうらみも  
愚痴となるキミ乃心又曇りが有るをいな

○浮世

長い様を短いは人間僅か五十年聞いて驚りま可惜娑婆  
世界こんな腕然くらさりぬか此から浮氣もせにやあら  
ぬ末は堂をも無茶苦茶まじ先な親父さんの野暮の稟性死  
んで又來る釋迦じや有まいし何の其乃浮名厭ふて色がな  
る物り異見位で切れる氣ならばエヘン最初お惚や拵ぬ

○長 唄

○替唄 御所車

江よ迷ふ船が帆かげに飛ぶ千鳥風に行ふを曲浦のうけて  
 せわしき雌雄の浪むすぶるよしの定めなくはだこぎやら  
 ぬ捨小般。厂ふたのみて水莖のまゝも迷ふ戀の淵。こそ  
 ふ流せのまとの君がことばうれしき聞のうち

○新調 水石契久 都おどろ

動ささき御世、いちじるく、さるれ石の、いは母の、元おど

さ出る、泉やよとに、すめらぎの、にぎりあき世を、仰ぐ  
 なし

「よき憲法を、敷嶋のうらぶあへくもあらをとし、うれを  
 樂しむ、民草の、しげれる末ころ、たのしき色」このとれ  
 と、むへもとみなん、ささのけていげむ美術の大やまど「  
 松と竹とは、色かゝるゑ、それお色よき紅梅の「女紅の庭の  
 とりぐにうれ裁縫や、ものまなび「うたひつ、舞の手も  
 すまに、かぞす扇の要ども、つとめてはげむ、廓ぶりと伴  
 ない向か展覧會「見まくはしごと四方津國、爰お都の名

もふとて、今や吾妻の殿造り三ツ葉四ツ葉の、歌人の、ろ  
 のいにしへも思ひやるゆたけき旅に、逢坂の空音ゆるさ  
 ぬ、ふることも思ひ大津や、心せく勢田の名も有、夫婦橋  
 ふらり連だつ中へは、宮らやまゑとも人や見ん、横田の  
 川や、横さはに、世を渡る蟹が坂爰に住よた坂の下、遠  
 さとよくを、ふみこたて、つとめれうさも晴渡る雲津の川  
 も、打渡り、澄みに澄たる、宮川の、宮居尊さ、ふた柱、ふま  
 拜さゆ、是やこの、ひと目に見ゆる二見浦「遊びにむれ  
 るうなひ子の、かいぐしくも、敷ひろふ、うけ櫻貝、いた

ら貝、沙のひる間を、やて貝や、日もうらやうと、赤貝あ、  
 通ふ伊勢路の、舟の道、けふ帆立貝國ぐれ粹と酢貝の、  
 乗り合に、見とめる戀の、片思ひ、ゆわびの貝乃、あはぬ夜  
 をうらみて文を、この言や終してさうらの、さう終ごと、  
 千のも妹脊の、うに貝と、うらと樂むおもしろさ「西に東  
 にさく花の、爰ぞ賑おふ、八坂にの「まがたましくしげかた  
 かこの、目もとふあいをやすかみ、てらと月日とこの里  
 のさかゆくすゑ夜ねがふなり

○ものまね

役者どめいくの思ひくお任す

○奈智瀧祈誓文覺

衣川内の場

上るりつげ 告じたる鐘は無常をさるひくる生者必滅かりの世  
に覺悟を死出の袈裟御前夫とすゝめ我居間へ誘ひ置く  
空憚のもぬ々の床を忍び出で

(袈裟御前)今立ちしハハツの鐘こよひすはたはる月かたも  
曇る心のうそ墨おちりて行く身の筆のあと音のふ人ぞ

待りらめ

洗ふみどりの黒髪へ著なす烏帽子の水莖の跡もみさをと  
守る戸をあけて泪にふし沈む

○同局口れ場

掛合

文覺 和尚 團十郎  
前兵衛尉 光能 左團次

(文)入道清盛猛威お募り一門の奢侈暴政至らざる所なし  
有るに甲斐なきは方は平氏乃爲めに拵は免られ叡慮を惱  
ま務たまふゆありさまゆいたわまぐやまも中々恐れあり  
衆庶こぞつて入道がまぐむらを食はんをとるもの毛なく

今や天下亂れんとぞること平氏乃舉動に顯然たり此義奏  
 問答んぶ爲先無道と知く參つたり(光)ム、左て終あらめ  
 能ぞやされまな上を煩はせん事を祈るの適なる志ざし  
 シテ又暴威と挫かん企てやゆか(文)別お介といはず併し  
 平家の暴威と惡むもの此日本に少からむ何卒して其人を  
 さして院宣下したまはば天下の益々泰平なりゆ身心に叶  
 ひたまはば奏間あつて然るべし無道乃振舞致せしも此事  
 城なさんた光ゆるしたまへや兵衛頭殿(光)斯迄心を勞す  
 ると非なる振舞すともゆ國の爲ゆかでもとわん安堵お

られよ文覺殿(文)スリヤは身とり奏上あるとな(光)ゆか  
 にモ即日事をなさん(文)ナエ、忝けなひ

○伊勢音頭戀寐刀

古市油屋の場

福岡貢  
 仲居まんれ  
 料理人喜助  
 高五郎  
 傳五郎  
 八百藏

(貢)先達て藤浪さまの御心添成もめて仰答下されし本國  
 阿州なる伯父大學殿が謀反に組す徳嶋岩次といふ待まつ  
 た城下の町人藍玉屋喜多六此者共こそ此伊勢路へ密かお  
 入込と万次郎さほよ害をなさんと巧みし様子下坂の刀を  
 奪ひ取て万次郎さまの落度となし殿様までを罪お落し阿



波一國を押領務んと伯父が巧み打紙をかたり取たも皆此  
 手筋より引捕らへ詮義との思へども何をいふにも岩次と  
 いふ侍喜多六といふ町人兩人ともに人相格好藤浪さ  
 まと聞るといばつくんの相違何ふもせよ是には仔細  
 の有るな事其上おさしおこんの兩人共に身受なして本國  
 へ翌は發足ふすとれ事モシ又彼等が大學どのの廻し者あ  
 てあるならば先達てかた取たる折紙ころ伯父が手へ渡  
 るの必定左すれば折角手入りし是なる下坂の刀とて折  
 紙なくくは何の詮なし其折紙ころ正しく徳島岩次といふ

待がユリヤ今宵は爰を動うをぬとへ(まんの)何貢さんが  
 おいなんしたとへいよそこへ往てお斷りを申しませぬわ  
 ……チ、貢さんようおいなんしたなア(貢)チ、まん乃か此  
 間は逢や務ぬのトかすめたる踊り地に成り(まん乃)毎晩  
 の様にお出の噂さの聞たを此間の阿波の客でとんと座  
 敷が放されぬによつくしみぐお目に掛りませぬが貢  
 さん今夜をたこさんの出来ぬわいなア(貢)ム、ろんなら  
 矢張阿波の客で(まんの)けふの芝居の初日由玄見物に行  
 うしやんしたが戻りにて朝吉でお敷座が有るとの事いふ

ア(貢)捲んならぬおこんのまだ戻らぬか(まんの)アイまださ  
 ん(貢)コレまんの一寸おまんお逢たい物トやが我身  
 どうぞ都合して逢はしくいたもるまいか(まんの)うまや  
 モウお馴染のお前じやによつくと字かして上たいをど  
 お客は阿波のお待モウく六ヶ敷てく粹とふものは  
 少しもまんぢぬゆる一寸の首尾も成ませぬ今夜とお歸り  
 なさんぢいさア(貢)そぢいふ事ならぬおこんには別に逢ひ  
 ても大事ぢが一寸爲で待合をねばぢらぬ事もありコレ  
 萬のなんと興の舞の稽古と見ても大事あるまいかの

(まんの)イエくそりやなりさせぬ奥はお客の氣速ひお  
 客もムんすふよつて外のお客と座敷一ツにしたら大体  
 やかま悪い事ではムんせぬ舞の場所へとてと顔出しもし  
 て下さんすな私しご迷惑せるわいなアおまへ今宵中待た  
 迎所詮おこんさんお逢れぬ程おちやつと歸りなさんせ百  
 よも成ぬお客に附合て居るのもうめどしいものぢやなア  
 、、、、ホ、ホ、、、、私しや心付にいひまゑの貢さ  
 ん必らお氣おさへて下さんまなゑたが其様よ爰等に居る  
 くば誰ぞ替りの子を呼なさんせ(貢)ろりやモウどやなり

と仕様しやうのいのいのの（やんのよんのの）ム、夫それでは替かりの子こを呼よなさんす  
 の貢みつぎさんようやアいなんしたなサア貢みつぎさんお遊あそびなら  
 お腰こしの物ものをお預あづかりや志まま志ま（貢みつぎ）イ、ヤ此この腰こしの物ものの  
 （はんのはん）此この廓くわの習ならひを知らずか何なんぞの様やうふサア預あづか  
 せうト腰こしの物ものに手てを掛かけるを突つきの々か（貢みつぎ）イヤめッたにの  
 預あづからせぬ（やんのよんのの）そんなら歸かへまなさん怒いか（貢みつぎ）なんと（ま  
 んの）ハテ伊勢いせの油屋あぶらやでの腰こしの物ものを預あづかるは昔むかしかゝの掟おきて  
 夫それに預あづかられぬといはしやんすればあつちもた容さやかひ仕し  
 憎にくふムんす程ほどに早はやふ歸かへつて下くださんせ（貢みつぎ）う字じでも有あらう

ぶちつと爲に(やんの)用が有るなほ預けさせやんお預け  
 る事がいやならばお歸なんおサア〜サアエ、埒わか  
 ぬ切ないんで下さんせ、、、(料理人喜助)アイヤ其か  
 腰のもの私しがお預りやしませ(貢)誰かと思へば料理  
 人の喜助ろんならそなたが(喜助)貢さや毎晩のやうよお  
 出なさるそうにふりやすするが私しも此間は居續々のお容  
 さはる殊の外のいぢがしきふつひお目に掛りませぬ(や  
 んの)コレ喜助とんそんならあなたが腰の物と(喜助)  
 貢さやも今るよお藤浪さまの御家來なれと元は歴々のね

侍さまと聞ましゝ女子供のかゑいづみおサイそきとお預  
 けも有まいと推量したゆゑ身より賤き料理人の喜助な  
 るど男の端くを私しに預り、ハハ私がお預まやし  
 まするからは決して氣道ひいムりませぬ(貢)然らばろ  
 の方に預ふ大事のト腰魚相のあき様頼んだろよ(喜助)  
 しつかりとお預り申します(まんの)ドレそんなら小口の  
 次の間へお遺まやませせう喜助どんね連れやまておあん  
 さんね替りにいよいよ女郎さんを世話してあげ様わいなア  
 (喜助)イヤヤし貢さま憚りながら私しがや上げ度事がム

りまきる(貢)アノ己しに(喜郎)どうぞ一寸あせませ

(貢)ムウー喜助シテわしへの用といふは(喜助)只今改め

くやしやすふいかなれ共私えが親共いあなたのは親

父さま中間奉公親旦那のは供して阿波より志州の鳥羽

へはひつそく親共も奉公を引さ此の伊勢よわづかの暮え

老病の枕元へ私しを呼び福岡孫太夫さまのは養子貢をせ

は我々親子が古主の若旦那随分とも影なごら心を付く

忠義を盡せとの遺言此の事いあなたおもよう存じの事

なれども此様に毎晩出なされまして身お禍ひを招

く道理も玄あ取たさまの落度にもなりませうかと及ばず  
取がら古主と大切に存じまするゆゑちよこ才な私し先が  
は意見貢はま必らずは心にさへふれて下さりませするす

○意中謎忠義畫合

新宮屋敷身替の場

新宮の後室千壽 團十郎  
新宮小太良光家 高福  
根之井大彌太 左團次

(小太)シテ母上には姫君のは身の上はいかゞある

(千)サア包んで詮なた事あれば亥の刻までには生害をお

勸免やと所存ぞやわいのう(小太)スリヤあの姫君さまと

(千)つづれ娘の其の内にて(小太)スリヤ兩人の妹乃内

(千)女ながらも武士のたぬ忠義に死ぬるの身の冥加願ふ  
てもない事じやわいのー

○をなじく

是は根の井殿の検視のた役目は苦勞至極も存玄ま

とる(大彌)ナ、千壽殿か久々にて面會致す今日某し上使

お立ち玄信玄公の嚴命の先刻子息へや聞け置たきば定め

て承知さるらうナ(千)ハッ上意の趣さの承知致して居

まとる(大彌)承知どの惡ひ了簡義元滅後の日影の身不自

由勝な笹づる姫首にしく渡さうより美人の聞ゆる由



○信玄公乃お手廻りへ宮仕へみさしわかくなば死ぬるに堪  
 る其の身の仕合某とても其の通り不忠不義ともいへば  
 いへ欲汝知らぬは馬鹿の内ム、ハ、ハ、ハ、コリヤ深ん  
 咄まゝする必らず腹ふさへられな

(おどろい)

○笑ふ寐顔にまた一ト思案どよの夢やふ氣ふかゝる  
 ○あいとあの時返事汝せねば今の苦勞の仕まいもの  
 ○是かふまの地は吉原たんばあつ地へ遊びに千住行

○笑ひれながらも蔭膳とへて逢とぬ其夜の帳を消さ  
 ○見送里たらせよ二階の手すり此方お向と口の内  
 ○枕屏風で朝日汝よりや主がまぶしい當こすぞ  
 ○お茶汝と差出す其途盆で寫さ互の顔を顔  
 ○浮氣しや字と其氣休めの枕言葉がにくらしい  
 ○なかのよみ同士吸付煙草煙りも並んる横にある  
 ○ざれて昨夜はあたつた煙管今朝へ兩人で引張子  
 ○義理へ左りの手を質に入れ右る留めたる主の袖  
 ○留めよか返そか思案の屏風戀と義理との蝶番ひ

- 手札てよだと心こころやです首尾あしびしてせひに妾めかけしやくるのを松まつの内うち
- 解とけてしつばり寐ねる夜よの帯おびも縹しほ子こと博多はくたの腹はら合せ
- 夕ゆふべぢらした其そのかゝき討うち今朝けさの取とる氣きで首くみツ玉たま
- 牛うしに玉たま子まごよどせうに空そらなごうしてまゝめるも乃のがあは
- 耳みみつこすまの別わかれの際きまにちよいと寒さかさの羽はがい
- かくまされなれ嬉うれまゐあとが朝あさ日ひおちらつくはれ目ま臉め
- ぢらす積つみりうある下げ簡けんかなどと心こころを廻まはし部べ屋や
- 人ひとよやれれす只ただ胸むねの字あまてを乳ちち迄までくろろの岩いわ田た帯おび
- 粹すいに燈とも火あひさやした風かぜがよくや浮うき名なと外そとへ吹ふく

- を川がわと赤あからむ紅葉もみぢの顔かほに霜しもがあけさり薄うす化粧けいよう
- 曇くもる思おもひの今いま霄せうは雨あめか月つきもろさきてすまぬ顔かほ
- さかせぬ此この身みの何なにしら張はりや秋あきの來きぬ間まは捨すて團だん扇せん
- 逢あぬ夜よの便たよりお氣きも飛とび梅うめと成なつく笑あは顔はの走はしり咲さ花はな
- 仇あだな立たて膝ひざ髪かみかき上あげて忘わすれちや厭いやだよ今いまの事こと
- 何なんんみ苦く勞ろう我われ舌した切き雀せきなめもしないお此この空そらさな
- 浮う氣きな心こころお空そらさ危あきはりとらやらそろく秋あきの風かぜ
- こまに逢あふ夜よお弾ひく三さん味み線せんも積つれ口くち舌ぜつで忍しのび駒こま
- つらに分わかれれ此このきぬくひらく舞あふさぐ胸むね

○人目忍ひとめしのんて降かれ五月雨さみだれは濡ぬれゝ同士のさよめごと

○忍しのび足あしして閨はなれ戸明とあけてソットたち聞きく虫むしの聲こゑ

○是これが苦勞くろうの種蒔たねまよと、しらせ舞まうてる三番さんぱ終はち

○またし計おがりを守まもつて居ゐずと少すこしや浮氣うきもお雛ひなさま

○沈ちんむ思おもひの情なさけも浪なみの主ぬしに焦これて五十鈴川いそがわ

○止やまぬ浮氣うきはきのお前まへと契ちぎりと空なか成なやら知しれぬ末すへ

○意氣いきな姿そなたの權妻ごんさいさんと花はなが昔むかの香かが匂におふ

○鏡かみみ見るさへ未またはづかし私たわしや小猫こねこの化習はけならひ

○戀こいはくせもの月夜よをさくらむとかくやみ路じを忍しのびゆく

○遠とほひのらとて邪よこしまらさへなたりや夜毎よこおひ見る月つきと本もと

○くもる空そらさへ顔かほ三ヶ月みつぎよいつか思おもひもはるゝむね

○月のさわりと座敷ざしきをはづし雨雲あめぐもとなる間夫まぶの首尾くびび

○こころ月夜つきよにかげさす尸かみは嬉うれしやたのむの糸いとめかい

○月見つきみの晩ばんらふとし縁縁か今は月つきさへ見みぬくろう

○忍しのぶ戀路こいじの邪よこしまらおはなきと月つきがとりもつ縁縁もある

○待まちに來こぬ夜よの立たちまち居ゐまちつらや月つきゆへ此このくろう

○露つゆをふくんでなびいた姿すがた月つきも見みとれる女郎花かみなへし

○晴はれて嬉うれしう見みている月つき抜ひいても邪よこしまらさる雲くもがある

○お顔かほ三ヶ月さんげつうれから深ふかぬどかく戀路こいじのみつるもの

○月夜つきよからすてお客きやくをかへし間夫まぶに誠まこととありの鐘かね

○嬉うれしい首尾しゆびしてはうく歸りかへや月つきも悒氣うんきかあどはける

○花はなの先さきがな手柄てがら乃梅うめを憎にくくや横面よこづらは乃の風かぜ

○鐘かねの憎にくさを覺おぼえし朝あさが互たがひお心の苦くるしみの初はじめ

○眞心まごころ明石あかしと逢夜あかよの首尾しゆびみ人目除ひとめよける須磨すま簾すたれ

○牛うしの乳ちをもチトお吞のみなと角つのを生はやさず粹すめにや々

○逢あは恨うらみと愚痴ぐち唐崎からさきへ云いひよお傍そばへよるのあめ

○別わかきりや他人たにんと鳴見なるみの袷衣あかた夫それまごころん迄しほ紺こんよく綾しほりどる

○包つつひもくこのツイ解安とくやすひゑんも由縁ゆかりの濃こむらさた

「思おもふお前まへと添そはせるならば　ハウタひと（人のそまも世よ」

の義理ぎりも　「なんのかまひて居ゐるものゝ

「氣休きやすめ上手じやうずな其口前そのくちまへじや　清元きよげん（記証きじよう誓紙せいしと取換とりかし

深ふかむお方かたが有ありながらかくして置をて又またわしに

「惡にくひお世辭せせの程ほどのよさ

「有ありば有あり丈あまた戀こいゆへ金かねも　梅川うめがわ（つかひはたして二分にぶ

残のこる金かねより木事たゐじな

「ぬまにや出たさせぬけふの勘定つひ

「主に別れて半月ばかり」

清元（一日逢ねば千日の思ひに妾しや煩らふて

「包する隙さへ泣くばかり」

「ぬしが各ざしる揚ッたわさし」

富本（堅ひ約束石山の其のた出しの始先からしつばり

雨の居續々に 「互ひにあのした胸のうな

「老やけんべかりが男れ情か」

清元（今さらんふも愚痴ながら

「ふびんど一言も言れたん

「戀ひに心もあのやみの夜に

ハウタ（忍びくって合惚きの口説の床の泪あめ

「晴れて添ふ日と松の月

「ぬたり手を取り目立ぬとふに 清元（しのび忍んそよ

ふくと 「来て見とや浮名ぶの先まじり

「ぬしが下戸ゆへ妾が傍で ハウタ（指た盃押へてす

けりや 「とざとのませる野暮なれや

「色の手習ひ情々の病ひ

お半（いとし可愛の敷々がつもると書て癢とやら

「實の戀ゆへこのやつれ

「儘にあるな夜を明々さづに

ハウダ (びんのほつきは枕のどがよ

「抱て寐まきの此まだら

「離れ座敷の障子と明て

秋のよ (萩の花桔梗のるのや女郎花菊見る月の秋乃景

「桐の一葉が氣にかゝる

「誠あかしたユノ身の索性

梅川 (わたしのかゝさん父さんは京の六條の珠敷屋町

「どうか見捨て末ながを

「藝の寶と仕込だものが

安達 (露命をつなぐ古糸の皮も破をし三味線の

「役に他人の門を立

「廓のならしいのアノはとくぎす

一中 (泣て見劣ると笑ふて見こり唄ふて見たりひく撥

の 「嘘夜月夜の空になく

「私たまや新茶をよだあく抜ぬ

端うた (色も香もある好た同士粹な浮世を野暮らしい

「承知るお前は苦ひ顔マヘ にはが かま

「迷ひ込だお戀路の闇もマノ一 かよ こん こいぢ ぐみ

の方お慶 ひこ（獨り寐がちにまどろむさへ夢まぼろしふうゆと

さく中老 政尾（たとへ掟い破るともなきて やぶ

「通ひて見たいが身の願ひマノ一 とう みる みの ねがひ

「惚た証據おや指輪ふやでもマノ一 ぼれ しょうこ ゆびわ

大閤記（コレ見たまゑる光秀どのマノ一 たいかくき みた まゑる みつひで

「主しと二人の比翼紋マノ一 ぬ したり ひよくもん

粹の種本三篇 花の粹終

「承知まへお前は苦にがひ顔かま

「迷まよひ込こんだを戀路こいぢの闇やみも

お慶ひら（獨ひとり寐ねがちにやどろむさへ夢ゆめまぼろしふうり

さく中老ちゆうらう（たどへ掟おきて破やぶるとも

「通とめて見みたいが身みの願ねがひ

「惚ほた証あかし據あかしみや指輪ゆびわふやでも

大閤おほのゝ記き（コノ見みたよる光秀みつひでどの

「主ぬししと二人ふたりの比翼ひよくたん紋もん

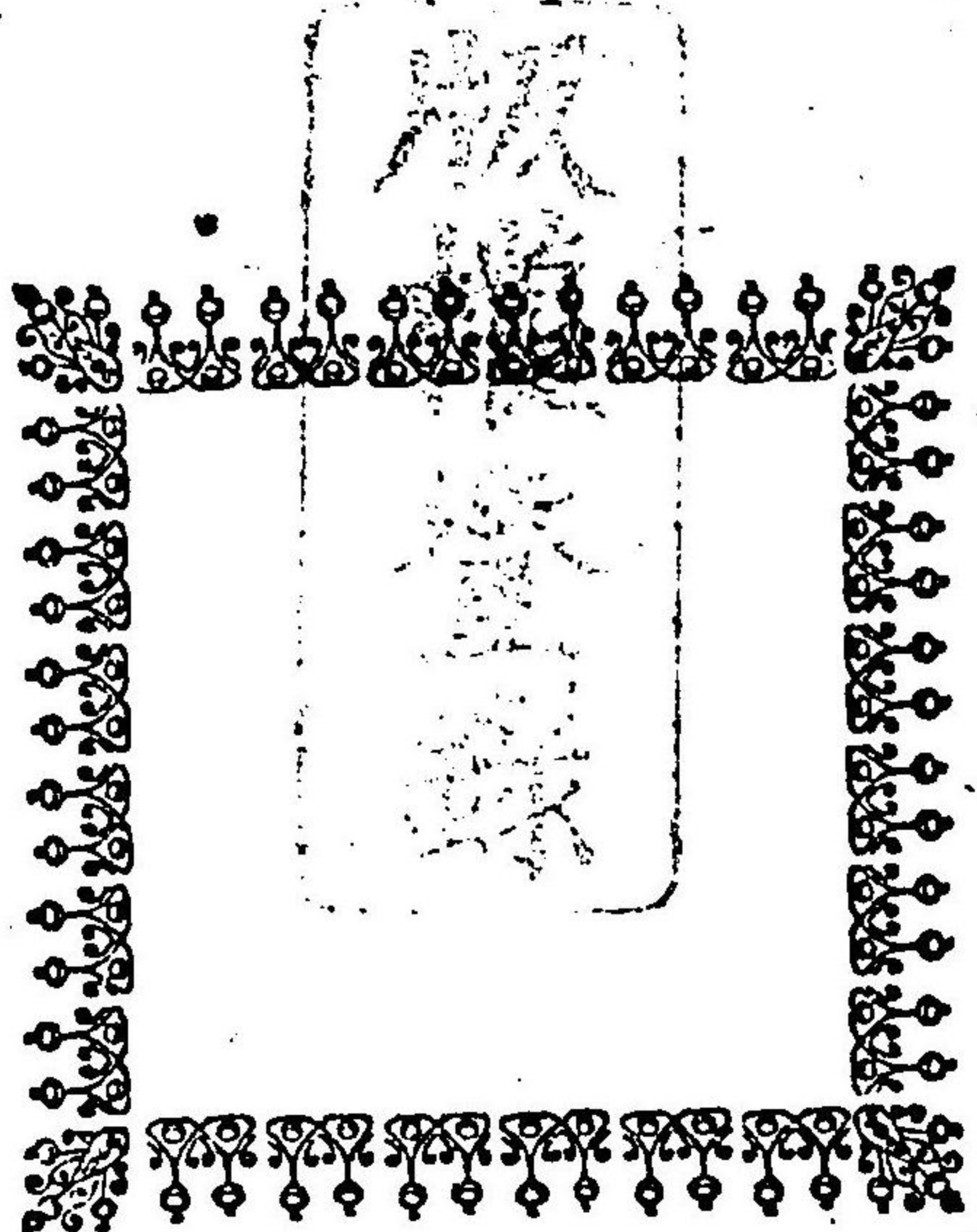
粹すいの種本しゆほん三篇さんぺん 花はなの粹終すいしゆう



明治廿二年七月十五日  
全 年八月廿八日

印刷竣功  
出版

定價金貳圓

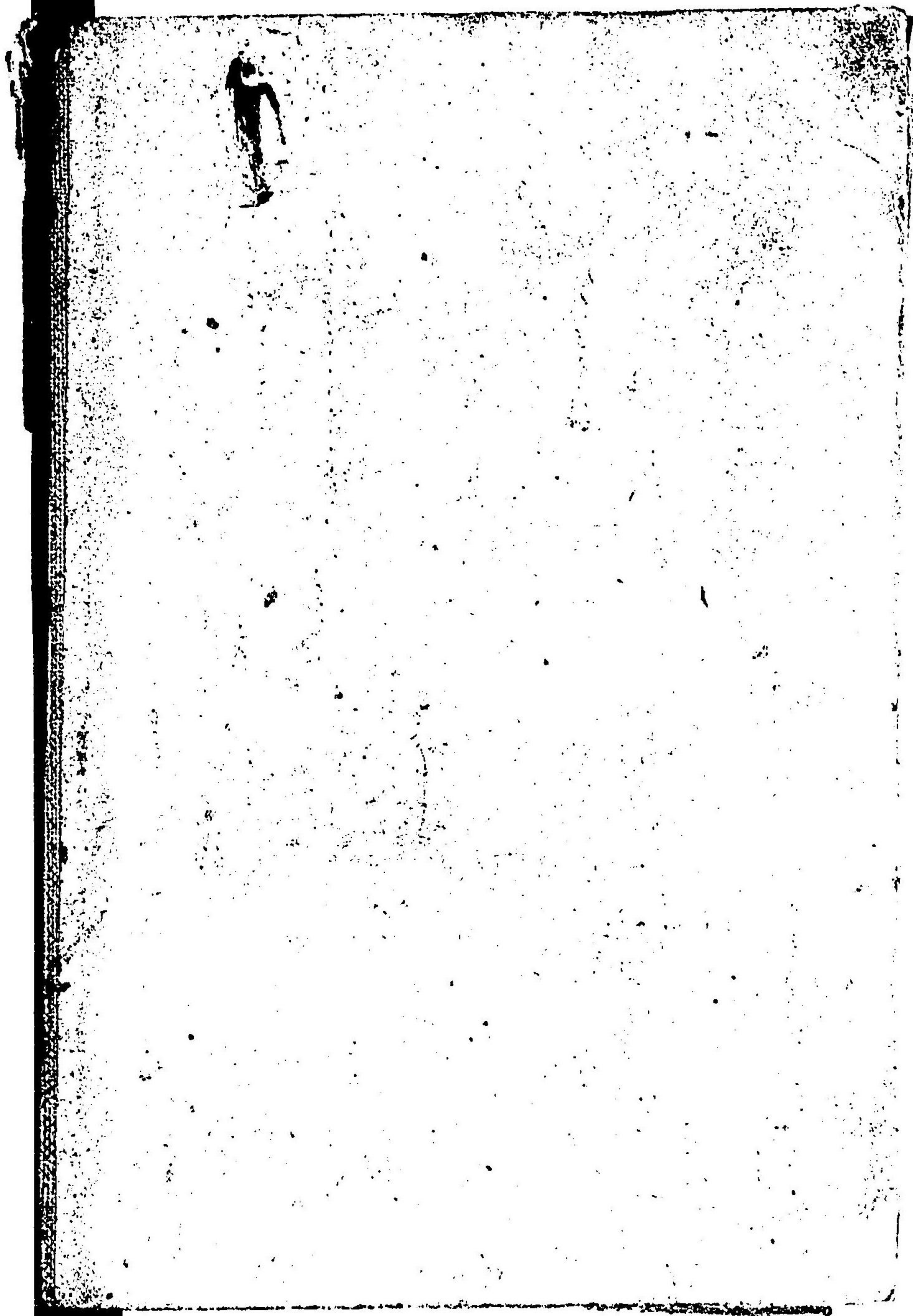


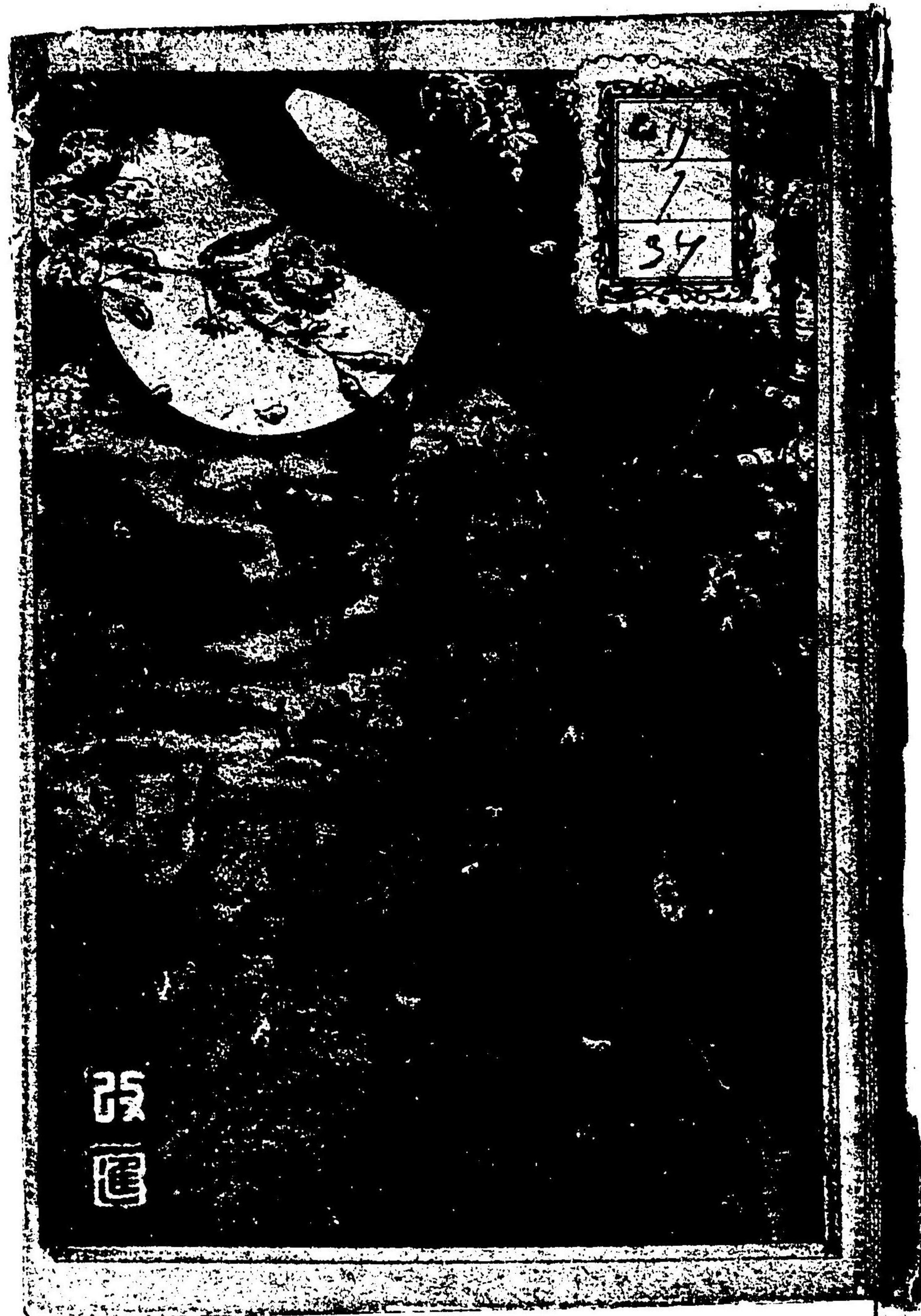
京都市下京區寺町通松原  
南入植松町四十九番戶  
著作兼  
發行者 內山 龜太郎

京都市下京區寺町通松原  
南入中之町拾七番戶  
印刷者 川勝 徳次郎

京都寺町通松原下

# 賣捌 改進堂書店





073749-000-3

特64-73

花の粹

山斑 粹史/関

M22

CEI-0281

